その後のゾンビ学園

～クリスマス編～

「えっとねえ、強いでしょ、優しいでしょ、たくましいでしょ～かっこいいetc」
　うさ子は目を輝かして語っている。
「ふうん」
　美雪は気のない相づちをうった。
　うさ子があんまり担任の武田先生のことを「好きなの、好き、好き、好き」とうるさいので、「どういうとこが好きなの？」とうっかり訊いてしまったのが、間違いだった。
　うさ子の武田先生の魅力について語ることは留まることを知らない。「走るのも速いでしょ 、顔もこわいし、ひげも濃いでしょ」延々と続いていく。
　ゾンビに襲われて絶体絶命の危機に陥ったとき助けに来てくれたこともあるし、うさ子が武田先生に憧れる気持ちもわからなくもないのだが、毎日だとさすがにうんざりする。
「でも来年で先生ともお別れだね。卒業しちゃうし」
　ちょっぴり意地悪したくて美雪は言った。
「う、うう」
　うさ子はうめいた。うさ子が来年三月の卒業のことは考えないようにしているのを美雪は知っていたのについ言ってしまった。
「あ、でも中学校は近くだからすぐ会いに来れるか」
　美雪はあわててフォローする。ちょっと可哀想になってきていた。
「そうそう！」
　とたんに嬉しそうな顔になった。
　相変わらずのうさ子に美雪は思わず笑ってしまう。冷たい風が口の中にも吹き込んできて少し奥歯にしみる。

　終業式を終えた帰り道だった。明日から冬休みがはじまる。初雪はまだだけど、もういつ降ってきてもおかしくないくらいに空気は冷えている。
　今年もあと少しで終わるんだ。美雪はしみじみとそう思った。春に起こった大事件のことを考えると無事に年末を迎えられるということが信じられないほどだった。
「さっむいね～～」うさ子は言いながら美雪の腕に自分の腕を絡ませてきた。セーターを通してあたたかい感触が伝わってくる。「明後日のクリスマス会のプレゼントって用意した？」うさ子は美雪の顔を覗き込むようにして訊いてきた。
「え？　結局なにもなしにするって決まったんじゃなかったの」
　美雪は少し驚いて訊き返した。美雪とうさ子が幹事になって進めてきたクリスマス会だったが、人数が多めなのでなんとなくプレゼント交換はやめるという話しになっていた。
「やっぱりさー、プレゼントなしじゃつまんないし。クリスマスだし。お母さんに訊いたらさー、安い物でいいから一個ずつもってて、順番に回していくの。で、音楽が止まったとこで、持ってたプレゼントもらっていいってやり方、子供の頃やったんだって、それやらない？」
　美雪はそのやり方を知っていたので、すぐにうさ子の言いたいことがわかった。
「うん、いいと思うよ。でもみんなに言わないといけないし、間に合うかな」
「だいじょうぶ。あたしが連絡しとくから」うさ子はそう言ってから意味ありげな目つきで美雪を見る。「あ、伊達には美雪からお願いね」
「なんで、私が」と言おうとしたけれど焦ったせいで舌がもつれて「な、なんで、わっしが」と言ってしまい美雪は思わず頬を赤らめた。

「そんな動揺しなくても……」うさ子は呆れたように美雪を見る。「ねえ、美雪、好きなんだからそろそろ告白しちゃったりしてもいいいんじゃない？　クリスマスだし。ああいうタイプは待っててもダメだと思うよ。それに、いつ何が起こるかわからないんだよ、人生って」
　うさ子は冗談めかすことなく真面目な顔でしみじみと言った。
「まあ……、そうだよね」
　急にうさ子が大人っぽく思えた。何も考えてないようでいて、うさ子も成長してるのかもしれない。
　ふと気づくと分かれ道にさしかかっていた。ここからは別々の方向にそれぞれの家路がある。
「じゃあ、そういうことで。明日、プレゼント買いに行こうね」
　うさ子は言ってから歩き出した。
「あ……、うん」
「じゃ、寒いから風邪ひかないようにねっ」
　振り返ったうさ子は自分のセーターのすそを握りしめたままで、ぶんぶんと元気よく手を振った。
「……あ、ほんとに私が連絡するの？」
　駆け足で去ってゆくうさ子の後ろ姿に美雪は訊いた。
　うさ子はくるりとふり返って、指でピストルの形を作って美雪を撃つまねをした。
　BANG!
　当然よ!とでもいいたげな笑顔で。

夜、美雪は自室で妹に借りたマンガを読んでいたが、ストーリーは全然頭に入ってこなかった。伊達に電話をしなければならない、という緊張で集中力がまるでなかった。
春に起こったあの事件の後、両親は美雪のことを心配して携帯電話を買ってくれた。同じような心配を持った親たちは多く、クラスメイトもほとんどが買い与えてもらっていたが、伊達は携帯電話を持っていなかった。
だからメールで済ますこともできないし、彼の家に直接電話を掛けないといけない。電話だけでも多少は緊張するのに母親が出るかもしれないと思うとさらにドキドキしてきてうさ子を恨めしく思ったりもした。
美雪がマンガを読むのをあきらめて、持つだけ持ってみようと携帯電話に手を伸ばしたとき、着信があった。液晶の表示を見ると「宇佐見　唯子」うさ子だった。
「やばいよっ！　どうしよう」
いきなり飛び込んできた慌てた声のうさ子に美雪は猛烈に悪い予感がした。
「なに？　どうしたの？」
美雪はおそるおそる訊いた。
「連絡とかあったからパソコンでメール作ってたんだけど、なんか盛り上がってきて、ラブレター書いちゃったの」
「ラブレターって誰に？」
「リイ先生に決まってるじゃない」
リイ先生というのは武田先生のあだ名だ。
「あー、そうだよね」美雪は納得した。「え？　まさか出しちゃったの」
「……」
うさ子は黙り込んだ。
「えー！　やばいでしょ、それは」
「だよね……」
「でも冗談でしたって言えばだいじょうぶじゃない？」
「まあ、リイ先生ならね……」
猛烈に悪い予感だったけど、意外とあっさり収束しそうで美雪はほっとした。
だが、次に発せられたうさ子の言葉にそれはかき消された。
「間違えて金太に出した……」
「どう間違えたらそうなるのよ！」
美雪は思わず大声になって言った。
「作ってた他のメールとごっちゃになってて、よくわかんないんだけど思いこみってやつ？」
「でも送っちゃったんならどうしようもないでしょ」
「そんなー、あれが金太に見られたら、あたしどうすればいいの……」うさ子は情けない声を出した。「あのバカ絶対言いふらすよ」
「そんなにやばいこと書いたの？」
「うん、ホントに送るつもりなかったから……」

　だったらメールに書くなよ、と美雪は内心思いながらも別のことを思いついた。
「あ、慶太君に頼んで消してもらえば？　金太君のパソコンに送ったんでしょ。まだ見てないかもよ」
「あー、それいいかも。ちょっと美雪電話してみてよ」
「なんで私？」
「いまケータイないもん。出かける時しかケータイ持ってちゃダメッてお母さんに取り上げられたの。言わなかったっけ？　そういう約束してるの」
　うさ子が散々悪さをしたせいで出来た約束だった。
「そっか。じゃあ掛けてみる」
「ありがと」

嵐山家の金太、慶太兄弟は二人で一つの携帯電話を与えられたが、金太があまり持ちたがらないせいで小学二年生の弟の慶太がほぼ独占しているらしい。美雪はそう聞いていた。
その番号に掛けた。
「美雪さん？」
可愛らしい男の子の声が聞こえる。美雪が慶太と話すのはわりあい久しぶりのことだった。
「あ、慶太君。ごめんね、夜遅く」
「いえいえ、大丈夫ですよ。どうかしました？」
慶太は相変わらず言葉遣いが丁寧だ。
「あれ、今お家？」
大勢の人がいるような気配が電話越しに感じられて美雪は訊いた。
「いえ、今日は母の実家に来ているんです。それで親戚が集まっていて食事をしているので賑やかなんですよ」
「そうなんだ。お兄さんもそこにいるのよね？」
「いますよ。替わりましょうか？」
「いや！　いいの。……あの、ちょっと頼みがあるんだけど。金太君には内緒で」
「なんでしょう？」
慶太はさらにあらたまった声で尋ねた。
「お家に戻った時にね、消してほしいメールがあるの」
「え？　どういうことです」
美雪は慶太にことのあらましを伝えた。理解力の高い慶太はすぐに状況を把握してくれた。

「なるほど。……それはちょっと厄介なことになるかもしれませんね」慶太は声を曇らせた。「というのも兄のメールはパスワードで厳重にロックされていまして、僕にも他の家族にも決して見られないようにしているんです」
「そうなんだ……」
「でもパスワードさえわかれば何とかできる思うので聞き出してみます。明日には家に戻るので、それまでになんとか」
「ありがとう。おねがいね」
電話を切った。

美雪は今度はうさ子に電話をして慶太との会話のおおよそを伝えた。

「つまり今夜中になんとかしなけりゃメールが金太に見られちゃうってことね」
そう言ううさ子だが、あまり気落ちしてないように美雪には思えて違和感をおぼえた。
「まあ、慶太君がなんとかしてくれるでしょ」
「いや、それは確実じゃないわ」
うさ子は妙に芝居がかった調子で言い放った。これはよくない兆候だった。
「ちょっと！　なに企んでるの？」

美雪は思わず大声になって言った。
「今から行くから、なんとか抜け出してね」プツ！　一方的に電話は切れた。

美雪が二階の自分の部屋から家の前の通りを見ていると、本当にうさ子がやって来た。うす暗い街灯の明かりの下、黒っぽい服装に身を包んで、なぜか頭に黒いハチマキを締めているのが見えた。そのうさ子が怪しい動きをしながら窓の下まで来た。
うさ子は美雪のいる二階を見上げると妙にキビキビした動きで「出てこい」という合図を手で送ってきた。

「えー、無理だよ」
美雪は全力で拒否した。何とか両親にバレないように家を抜け出したもののうさ子の提案を聞いてすぐ家に戻りたくなった。
うさ子は金太の家に忍び込んでメールを消去しようと言い出したのだった。
「大丈夫だよ。慶ちゃんがタラに会いたがった時とかに、何回か家のそばの公園に行ったことあるし」
タラというのは子猫の名前だ。もともとは慶太の猫だったが、家で飼う許可がでなかったのでうさ子が引き取った。
「そう言う問題じゃないでしょ。もう９時過ぎてるし、夜道が危ないし、不法侵入だし」
「あたしだってその辺は考えてます」
うさ子は自信ありげに胸を張った。
「何をよ？」
美雪はうんざりしながら尋ねたがうさ子は聞いていない。美雪の背後を見て「お、ボディガードが来た」などと呟いている。
振り返った美雪の前に力強く駆ける足音とともに闇の中から長身の少年が現れた。
「大丈夫か？」
伊達が上下とも白のスポーツウエアで立っていた。お風呂上がりなのか湿った前髪がその精悍な顔の額に垂れている。そして手には剣道で使う竹刀を強く握りしめている。
美雪は伊達には笑顔でうなずいて見せながら一方で隣のうさ子に咎める調子で「うさ子でしょ、呼んだの」とささやいた。
「まあね、不良に絡まれて美雪が困ってるって電話してみたの」
うさ子もささやき声で答える。悪びれた様子はない。
「ごめんね。どっか行っちゃった、ボーソー族」
うさ子が伊達に言った。
「……そうか。大丈夫なんだな？　それなら帰るぜ」
伊達は少し怪訝そうな顔をしてぶっきらぼうに言った。
「ごめんね」
美雪は心底申し訳なく思って言った。
「別に。ちょうどランニングに出るところだったからな」
お風呂上がりにランニング？と美雪は不思議に思ったが、彼なりに気をつかって言ってくれてるのかもしれないと思い、少しうれしくなった。

「あ、じゃあついでにもうひとつ頼まれてくれない？」
　うさ子はニヤっとしながら言った。

　それからしばらく、多少時間はかかったものの、口の上手いうさ子がなんだかんだと（美雪をだしにして）伊達を言いくるめ、結局、美雪の安全を守るという理由で彼も同行して金太の家を目指すことになった。

　そして不法侵入になってしまう件についても、うさ子はその舌をふるって電話越しの慶太を説得し、家に入る許可を取りつけたようだった。さらに家の詳しい位置を慶太にナビゲートさせるという。
　なぜ簡単に許可されたのか美雪には不思議だったが、なんでも慶太は猫の件でうさ子に多大な恩義を感じているという。それを利用して慶太の協力を得たのだった。

　夜道を歩きながらうさ子は美雪の携帯電話を使って慶太に家の位置を教えてもらっている。なにかいい加減な返事をしているように聞こえて美雪は不安にかられていたが、うさ子は家の位置をつかんだようだった。

「もうすぐ着くから、はやいとこパスワード聞き出してね」
　などとうさ子は慶太に言ってから長い電話を切った。
「もしパスワードがわからないままだったらどうするの？」
　美雪は訊いた。
「大丈夫！　慶ちゃんならともかく金太は単純だから絶対単純なパスワードに決まってる」
　白い息を吐き散らかしながらうさ子は自信満々に言い切った。
「馬鹿にしすぎなんじゃ……」
　あきれ顔で美雪は後ろを歩く伊達を見た。伊達は唇をわずかにゆがめて皮肉っぽい笑みを返す。

　うさ子が怪しい。美雪たちより先に立って夜道を歩いていくのだが、その動きが変なのだ。少し身をかがめて、小走りに、しかも壁際を選んで進んでいく。
「なんなのよ、あの動きは」
　ちょっと苛つきながら美雪は言った。
「映画でも見たんじゃねーの」
　興味なさそうに伊達が言う。
「いや、ゲーム。お兄ちゃんに借りて今やってるの。スパイみたいなやつ」
　うさ子が聞きつけて変な中腰のまま振り向きもせずに言った。
　そういえば最近、見つからないように敵の施設とかに潜入する諜報員が主人公のゲームにハマっているとうさ子が言ってたのを思い出した。

　先頭のうさ子がいつまでも小道の角に立ち止まっているので、イラっとした美雪が追い抜かそうとしたが手で押しとどめられた。
「ちがう、そこはこうやって覗き込むの」
　言いながら壁に背中をぴたっと張り付けると、その体勢で覗き込んだ。
　その生き生きとした横顔を見てると、メールを間違えて送ったというのは嘘で、潜入ごっこがしたいだけなんじゃないかと思えてくる。うさ子ならやりかねないところがあるのが笑えない。
「あーあ、今ごろ先生なにやってるんだろ、先生のためにアタイがこんなに苦労してるのに」
　うさ子はでっかい独り言を言っている。美雪は無視しておいた。

　無言のまましばらく歩いているとふいにうさ子が立ち止まった。遠い目をしてごくありきたりの民家を見つめ、
「ここがターゲットの秘密施設か……」
などとつぶやいている。
どうやらそれが金太の家のようだった。

＜嵐山＞とだけ大きく書かれた表札の前に三人はいた。当然だが金太、慶太の家に明かりはなく、シンと静まり返っている。
「伊達はここで見張っててよ」
　ハチマキを締めなおしながらうさ子が言った。
「見張り？　許可取ったんだろ」
　伊達が胡散臭そうな目でうさ子を見た。
「まあ、そうだけど。一応ね」
　うさ子はニヤッと笑う。

　美雪はまた悪い予感がした。許可を取ったというのも芝居だったら……。電話しているのを聞いただけで、慶太君に直接確認を取ったわけではない。
　電話するふりだけで実際は慶太君と会話すらしてなかったら……。
　――潜入ゲーム。うさ子とはいえ、ごっこ遊びのためにそこまでやるだろうか。警察に捕まってしまうかも知れない危険を冒してまで。

「そこのサボテンの下に鍵あるらしいよ」
　うさ子がのんきな声でそう言うのを聞きながら美雪が何気なく玄関扉に手をかけると、ズルッと扉が動いた。
「開いてる……」
　美雪は少し驚いたが、うさ子は全く気にしてないようで、
「行くわよ、美雪。静かに、慎重にね」
　そんなことをもったいぶった言い方で言っている。
　ごっこ遊びはいい加減にして！　美雪がそう言おうとした時、屋内から何か音がした。
　ハッとして音のした方、玄関からまっすぐ続く廊下の奥を見た。誰もいない。だが真っ暗な廊下に室内から漏れ出たうっすらとした明かりが落ちていた。廊下の一番奥の部屋のわずかな襖のすき間から廊下に射し込んだ明かりは、時折、赤っぽくなったり、緑になったりで点滅している。

「誰もいないはずだよね？」
　美雪はうさ子を見た。
「テレビが点けっぱなしなのかな」
　うさ子は光りを見つめている。確かに色を変えて点滅するその光りはテレビの明かりが室内から漏れているようにも見える。
　だが、音は聞こえない。先ほど聞こえた音もテレビの音というよりも人が立てた音のようだった。
「行ってみようよ」
　言いながらうさ子は靴を脱いで玄関に上がった。
　中腰になって明かりの漏れている部屋のそばへとゆっくり進んでいく。靴下をはいた足は音をほとんど立てない。
　おそるおそる続いていく美雪の目の前で、襖のすき間から部屋をのぞき込んだうさ子が一瞬全身をビクッとさせてから動きを止めた。
　うさ子が引きつった顔で手招きしている。
「見て」
　わずかに開いた襖のすき間からのぞき見るとシンと静まり返った室内は真っ暗だった。だが次の瞬間、明滅する光りに照らされて、ソファーに腰掛けている老婆の後ろ姿が見えた。
　痩せてしわの刻まれた首筋、こけた頬、乱れた白い髪、こちらからは後姿だけで老婆の顔までは窺うことが出来ない。
　その姿が赤や青の光りによって不気味に照らし出されている。老婆は微動だにせず、音のしないテレビ画面を見つめているようだった。
「な、なんで」
　ふるえる声で美雪はうさ子と顔を見合わせたがもちろん答えは返ってこない。
「なにかの間違いよ。慶太君に電話して訊いてみる」
　出来るだけ音がしないように気をつけながら美雪は電話した。
「着きました？」
　慶太がすぐにそう言ってきた。本当にうさ子と話はついているようなので美雪はその点だけは安心することができた。
「家の中にお婆さんがいるんだけど」
　美雪はささやき声で言った。
「え？　そんなはずはありません。おばあちゃんはこっちにいます」
「だっているのよ。確かよね？」
「確かです。目の前でお酒飲んでますから。家には誰もいるはずはありません」
「え、ドロボウなの……、え、なんなの」
　携帯電話に耳を押しつけて慶太との会話を聞いていたうさ子が青ざめている。
「痴呆老人が勝手に入ったとか？」
「そこにいるのはわかってんだよ！」
　しわがれた声が突然ふすま越しに聞こえ、美雪は心臓が止まりそうなほど驚いた。

「ひひひ、いま殺してやるから待ってな」
　室内からガタンと音がして老婆が立ち上がるような気配がした。
　だが、美雪はまるで金縛りにあったように動けない。なすすべもなく襖に描いてある変な植物の模様を見つめていた。
「ひぃ」と声を上げながらうさ子が玄関の方に逃げ出した。慌てすぎて廊下に置いてあった電話台にぶつかって電話が吹っ飛び、すごい音を立てて床に落ちた。
　身動きできずにいる美雪の目の前で襖がスーっと開いた。
「何してるんだい？　お嬢ちゃん」
　白髪を振り乱した老婆がそこに立っていた。
「ぎゃー！　殺さないで」
　廊下にうずくまったうさ子が両手で頭を押さえて叫んだ。
「あ、あの、ここは慶太君のお家じゃないんですか？」
　美雪は尋ねた。さっき聞いた恐ろしいしわがれ声とは違って、目の前のお婆さんの声は優しかったので怖さは薄れていた。
「おー慶太の友達ねー。こんな時間にどうしたね？」
　おばあさんは笑顔で言った。
「……あ、あれ？　どういうこと」
　うさ子がきょとんとしている。
　玄関口では今にも踊りこまんとして竹刀を握り締めた伊達があっけにとられた表情で立ち尽くしていた。

「あー、ゲームばばあだ。親戚の家ですね。隣なんですよ」
　電話越しに慶太がそんなことを言ったのは、おばあさんに事情を説明して、その家を出てからだった。
　おばあさんは夜中に小学生が外をうろついていることを咎め立てようともせず、親切にも隣にある慶太たちの家の中まで案内してから去って行った。これからゲームの続きをするのだという。
「ゲームが好きで近所の子たちにゲームばばあなんて呼ばれてるんですけどね。本人も意外と喜んでいるんですよ」
　慶太はそう説明した。
　おばあさんは単にイヤホンをしながらテレビゲームをしていて、それがうさ子がハマっているようなタイプのゲームだったので「殺してやる」とか過激な独り言を言っていたらしい。
　それを知ったうさ子は急にハチマキを取って、恥ずかしそうにシュンとしたから、おばあさんのゲームに熱中しすぎた姿に自分自身を見たような気になって少しは反省したらしかった。
「表札の名字が一緒だから気をつけるようにうさ子さんには言ったつもりだったんですけど、うまく伝わってなかったみたいですね。すいません」
「バカうさ子ー」
「もういい！　金太出して」うさ子は頬を紅潮させながら美雪から携帯電話を奪い取って電話口に出た金太に「あんたメールのパスワード教えなさいよ！」と怒鳴るようにして言った。
「え、なんでかって？　だから、その、ラブレターがアンタのところに……。……ちょっ！黙り込むなーっ！　ち、ちがうってばさ。アンタに出したんじゃないの。間違えて出しただけで。いや、だからちがう」
　うさ子は必死になって金太に事情を説明している。
「おい、金太のパスワードってひょっとして……」
　うさ子と金太のやり取りを聞いていた伊達が言った。
「え？　……あ、そういうことなの」
　美雪も思うところがあって、パソコンのキーボードを叩いた。何度か打ち直したが、あっさりロックは解除された。
「うさ子解除したよ」
「うそ？　すごい、やったね！」
　うさ子は嬉しそうに叫ぶと早速パソコンの前に陣取り、自分が送った間違いメールを探しはじめた。
　メール探しに必死になっているうさ子の少し後ろで、
「うさ子の名前がパスワードだったなんて言わない方がいいかな？」
　美雪は背の高い伊達を見上げて笑顔でささやいた。
「さあね」伊達はニヤッと笑ってから、
「言わない方がいいと思うよ、俺は」

それから、三人で夜道を歩いて帰った。
　伊達には遠回りになるが女子二人を家まで送っていくつもりらしく、（特に何も言わなかったが）三人で夜道を並んで歩いて帰った。
　夜が更けてきたせいか冷え込みがはげしく、変な黒い服で薄着のうさ子は「寒い、寒い」とずっと言っていた。
　うさ子の家に一番に到着したので、伊達と美雪はふたりきりで帰ることになった。寒くて家に早く戻りたかったせいもあるのか、うさ子はふたりを冷やかしたりもせずに帰っていった。

　美雪はいままで伊達とふたりきりになることがあまりなかったので、
何を話していいかわからずしばらく黙ったまま夜道を歩いた。
「あ、明後日のクリスマス会、プレゼント交換することになりそうなの」
　ふとそのことを思い出して沈黙の気まずさを解消する意味も兼ねて言った。
「だから何でもいいんだけど持ってきてくれる？」
　伊達は黙ってうなずいた。
　またもや沈黙。
　雪でも降ればいいのに、少し恨めしい気分で空を見上げた。
「いつ何が起こるかわからないんだよ、人生って」うさ子の言った言葉が気になっていた。
　告白なんて大それたことはできなくても、何かを聞きたいと思った。あまり語ってくれない心のうちを少しでも知りたかった。
「……そういえば伊達君が転校してきてもう一年になるね」
　ふとそのことを思い出して美雪は言った。
「ああ、もうじきな」伊達は少しうつむいてうなずいた。「……今まで俺しょっちゅう転校してたけど、ここの学校は強烈だったな」
「そうだよね。いきなりあんなことあったんだもんね」
　軽い調子で言ったつもりだったが、意図せず思い出したくない恐ろしい出来事の数々がよみがえりそうになり、美雪は黙り込んでしまう。
　それは伊達も同じだったのかもしれない。唇を固く結びまっすぐに前を見つめて歩き続けた。
「あ」
　気がつくともう家の前だった。
伊達は「じゃあな」とだけ言って立ち去ろうとしたが、ふと思い出したようにふり振り返って「
　確かにひどいことはたくさんあった。――でも、この学校に来たことは後悔していない」そう言った。
「……うん」
　その言葉だけでうれしかった。
　ああいう性格なので伊達ははっきり言葉にはしなかったが、いつも彼をそばで見ている美雪にはその気持ちがよくわかった。
　すぐそばで多くの人が死に、今まで想像もしてなかったようなひどいことがあの学校でおきた。

　だけど先生や学校のみんなに出会えたことは、かけがえのないとても大切なこと。どれほどひどい目にあってもそのことは変わらない。
　それは美雪も同じ気持ちだったから。
「送ってくれてありがとう。気をつけて帰ってね」
「ああ、……おやすみ」
「おやすみ」
　美雪は冷たい風に吹かれながら伊達の後姿を彼が闇に消えていくまで見ていた。

クラスのみんなが思い思いに飾り立てた教室の席に着きながら美雪は考える。
春樹君と吉光君が何のジュースをコップにつぐかで軽くもめている。病院のベッドが隣同士だったのが良かったのか二人は対等な関係を築いている。
教室のドアのあたりでは、金太君が慶太君をつれて来ていて武田先生に弟も参加させてくれと頼み込んでいる。
武田先生は「望むところだ」といった感じの笑顔だが、慶太君はちょっと困ったような恥ずかしそうな顔だ。
うさ子はやっぱりわたしの隣にいてきゃあきゃあとよく笑っている。他のクラスメイトたちもとても楽しそうだ。
そして伊達君は退屈そうに頬杖をついて窓の外を見ているが、表情はどこか楽しそうだ。
いつまでもずっとこのままでいたい。
卒業まで数ヶ月しかない。
このクリスマスパーティと同じように楽しい時間はすぐに終わってしまい、みんな離れ離れになってしまう。
いつまでもずっとこのままでなんていられない。
だからこのかけがえのないひと時を大切に過ごそう。精いっぱいに。

美雪はあたたかい気持ちにつかまれて、泣き出しそうな衝動と笑い出したいような衝動の板ばさみのような不思議な感情で、みんなと一緒にコップを掲げて「カンパーイ！」なんてやった。

パーティが始まる。

その後のゾンビ学園〜クリスマス編〜

http://p.booklog.jp/book/14403

著者：松岡
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/matuokayuusaku/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/14403

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/14403

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.